哲学の探求第37号　哲学若手研究者フォーラム　2010年6月（52-73）

不定記述の導入的用法

荒磯　敏文

0　はじめに

本稿では、不定記述（indefinite descriptions）が、私が導入（introduction）と呼ぶ言語行為をなすために典型的に用いられうることを論じ、それに該当する現象を「不定記述の導入的用法（introductive use of indefinite description）」と位置づけるための擁護を試みる[1]。

1 節では、不定記述の使用が、単にその意味論が示すような存在言明としてではなく、あるひとつの対象を導入する言明として解釈されうることを典型的な事例を挙げて示し、その特徴と哲学的な動機について説明する。2 節では、どのような条件下で不定記述の導入的な解釈が成立しうるのかについて俯瞰的な観察を与え、その条件として「最大スコープ仮説（maximum scope hypothesis）」を立てる。最後の 3 節では、不定記述の使用を導入的に解釈することを選好するような、あるメタ言語的な推論図式が考えられることを示し、不定記述が導入的「用法」をもつと考えるべきひとつの理論的な根拠を提示する。

1　不定記述の導入的解釈

1.1.　導入概念の特徴づけ

本節では、不定記述の導入的解釈として典型的と思われる事例を挙げ、それがどのような一般的な特徴づけを与えられるべきかを考察したい。

たとえば、昨日、私は、とある喫茶店で、可愛いウェイトレスに出会ったとしよう。翌日、そのウェイトレスのことを友人に話そうとして、(1) と言う。

(1)　　I met <u>a pretty waitress</u> yesterday.

このとき、特に阻害する要因がなければ、聞き手である友人も、私が誰かひとりのウェイトレスのことを話そうとしているものとして、ごく自然に（1）を解釈できるだろう。もちろん、それが誰のことであるのかは聞き手に分からないが、話し手もそのことを承知している。話し手は、そのウェイトレスを、新しく談話に導入しようとしているのである。そして、“a pretty waitress”という不定記述は、導入的に解釈されていると言えるだろう。

目下のところ、私は、この導入という概念を、以下のように特徴付けたいと考えている[2]。第一に、導入は、指示（reference）や述定（predication）と並ぶ、基本的な言語行為とみなすことができる[3]。第二に、あるひとにある対象を導入することで、そのひとは、その対象への対象関与的（de re）な態度をもてるようになる。詳しくは 1.5 節で検討するが、たとえば、聞き手は、（1）の発話を適切に理解することで、件のウェイトレスについて対象関与的な言明をなせるようになるだろう。この点では、指示もまた対象関与性を要求すると思われるが、指示の成立が、話し手と聞き手の双方による対象同定を典型的に要求する一方で、導入の成立は、話し手による対象同定を要求するものの、聞き手が当の発話と独立に対象を同定することまでは求められない。むしろ、聞き手は、対象を同定するためには話し手に依存せざるをえないのである[4]。

ちなみに、この第二の論点は、聞き手のもつ対象関与的な認識の拡張を引き起こすという意味で、認識論的な主張でもある。そして、この認識の拡張が本質的に言語行為に依拠しているという点に、導入という概念の哲学的な興味深さがあると言えるかもしれない。

1.2.　導入的な解釈と意味論との関係

本節では、不定記述の導入的な解釈と、意味論との関係を確認しておきたい。一般的には、不定記述には、“a philosopher”や“an apple”などの単数不定冠詞句と、“philosophers”や“apples”などの複数無冠詞句が含まれるが、ここでは、特に断りのないかぎり、単数の不定冠詞句に限定して議論をすすめたい。

さて、（1）では、“a pretty waitress”という不定記述が用いられている。通常、不定記述は意味論的には存在量化を示すとされ、（1）の真理条件は、（1-Sem）と表現することができる[5]。

（1-Sem）　$\exists x(\mathrm{Pretty}(x) \wedge \mathrm{Waitress}(x) \wedge \mathrm{Meeting}(I, x, \mathrm{yesterday}))$[6]

この（1-Sem）は、ある一連の性質——きのう私と出会い、可愛くて、ウェイトレスであるという性質——をもつ対象が存在するという真理条件である。すなわち、これらの性質をすべてもつ対象が少なくともひとつ存在すれば、（1-Sem）は真になる。一方、（1）が導入的に解釈された場合、あるひとりのウェイトレスについての言明として解される。その解釈は、たとえば（1-Introductive）と近似的に表現できるかもしれない[7]。

（1-Introductive）　$\mathrm{Pretty}(X) \wedge \mathrm{Waitress}(X) \wedge \mathrm{Meeting}(I, X, \mathrm{yesterday})$[8]

大文字の“X”は、導入対象を示す個体定項として解釈してほしい[9]。この場合、特に聞き手の立場から“X”をどう解釈すべきかが問題になるが、ここでは、導入が適切に遂行された場合に、適切な“X”もまた導入され、導入対象を指す個体定項として解釈されるとしておこう[10]。さて、明らかに、（1-Introductive）は（1-Sem）を含意するが、その逆は成り立たない。このことは、不定記述の導入的解釈が語用論的に説明されると考えるべき理由のひとつを与えるだろう。

さて、意味論との関連では、この段階でもうひとつ論点がある。（1-Sem）を真理条件とする文は、以下に挙げるように（1）だけではない。

（2）　I met at least one pretty waitress yesterday.

（3）　It is not the case that I met no pretty waitress yesterday.

しかし、これらは、（1）と同じ導入的な解釈をもたないであろう[11]。つまり、（1）、（2）、（3）の真理条件は、すべて同じであるにもかかわらず、ただ（1）だけが導入的な解釈を自然にもつことになる。これは、導入的な解釈の選好性が、少なくとも語彙や構文にも影響されることを示している[12]。このことは、不定記述という表現が導入的な用法をもつと考えるべき動機を与えると思われる。3節で取り上げるメタ言語的な推論図式は、この論点を展開したものである。

1.3.　導入の意図依存性

本節では、導入対象の選択が、少なくとも話し手の意図に依存することを確

認しておこう。まず、(1) についての先述の設定を少し修正しよう。すなわち、昨日、私は、三件の喫茶店に立ち寄り、それぞれひとりずつ、計三人の可愛いウェイトレスに出会っていたとしよう。私は、この三人の誰についても、(1) によって導入できるだろう。そして、(1) が誰を導入しているのかは、本質的に話し手（私）の意図に依存すると思われる。すなわち、かならずしも話し手の意図以外の要素だけで決定できるとはかぎらないのである。

この導入の意図依存性は、聞き手の側から導入対象を同定できないという特徴と表裏一体をなすものとして解釈することができる。

1.4. 誤記述の可能性

導入の意図依存性は、導入の対象関与性と合わせて、誤記述（misdescription）の可能性をもたらす。すなわち、導入対象は、導入に用いられた記述を充たすとはかぎらないかもしれないのである。

（1）の設定をさらに修正し、三人のウェイトレスのうち、最初の店のウェイトレスは、本当はウェイトレスではなく、そう装って張り込みをしていた女刑事であったとしよう。この場合でも、話し手は（1）によって、その可愛い女刑事を導入できると思われる。なぜなら、第一に、消極的な理由として、他に“a pretty waitress”の解釈が見込めないことが指摘できる。残り二人のウェイトレスはこの記述を充たすが、話し手の意図はこの二人にはない。それゆえ、(1) に導入的な解釈を与えようとしても、この二人のどちらかが選好的に導入されると考えるべき理由はないと思われる。第二に、積極的な理由として、誤記述の可能性を前提とした談話が、合理的かつ自然に展開しうることが指摘できる。たとえば、上述の状況で、(1) は、続けてこう展開できる。

(1-1)　話し手：I met <u>a pretty waitress</u> yesterday. <u>She</u> was such and such…
　　聞き手：I think <u>she</u> is not a waitress, but a disguised detective.

ここで、聞き手に自己矛盾的な思考を帰属させないためには、あらかじめ、“a pretty waitress”の導入対象がこの記述を充たさない可能性について、話し手と聞き手の間で了解が得られている必要がある。もし我々が第三者の立場から (1-1) を解釈するなら、話し手と聞き手は、お互いに可愛い女刑事について対象関与

的な言明をなしているとみなすのがもっとも自然であろう。

誤記述の可能性の淵源は、対象の導入というものが、その対象に対する話し手の対象関与的な態度の可能性を背景にしていることにある。このとき、導入対象が用いられた記述を充たすということは、導入が成立するために必ず充たさなくてはならない条件ではない。

そして、個々の誤記述の原因は、様々に考えられる。たとえば、この事例において、話し手は、女刑事をウェイトレスであると錯誤しているのかもしれないし、あるいは、真相を知りながら意図的に“a pretty waitress”と記述したのかもしれない。たとえば、女刑事の張り込みの邪魔になることを恐れたとしてもよいだろう。とは言え、いかなる誤記述も許容されるわけでないのは明らかであろう。許容される誤記述の条件を明らかにすることは、さらに検討を要する実質的な論点であり、おそらく言語哲学的な考察だけでなく、認識論的な観点からの考察を必要とするであろう[13]。

1.5. 継承要請

最前の（1-1）の解釈は、話し手と聞き手の用いた“she”を、“a pretty waitress”を先行詞とする談話照応（discourse anaphora）として解釈した上で、その解釈に、“a pretty waitress”の導入対象が何らかの仕方で受け継がれているということを、暗に前提としていた[14]。本節では、こうした談話照応には、導入対象を受け継ぐ解釈がありうるだけでなく、むしろ受け継ぐ解釈しかありえないということを指摘したい。これが、継承要請（inheritance requirement）である[15]。

具体例を観察してみよう。引き続き、三人のウェイトレスという設定である。

（1-2）　話し手：I met <u>a pretty waitress</u> yesterday. <u>She</u> has blonde hair.
　　聞き手：Take me to the cafe <u>she</u> worked at, please!

まず、“a pretty waitress”は導入的に用いられ、そして二つの“she”はこの記述を受ける談話照応として解釈されるとしよう。この場合、二つの“she”は、“a pretty waitress”の導入対象を受け継ぐものと解釈せざるをえないように思われる。すなわち、たとえば、話し手は“a pretty waitress”と“she”とで異なるウェイトレスを意図していると解釈することはできないであろうし、また、聞き手は“she”に

よって新たに別な対象を意図していると解釈することもできないだろう。談話照応を形成することで導入対象が追加されることや変更されることはありえず、その照応の連鎖に属するすべての代名詞は、先行詞と同じ対象が意図されている——すなわち、継承されている——と解釈せざるをえないだろう。

ひとつ注目に値することは、この継承要請は、話し手の用いる談話照応だけでなく、聞き手の用いる談話照応にも課されると思われることである。(1-2) では、話し手が誰のことを意図しているのかを知らなくとも、聞き手は“a pretty waitress”を適切に受けることのできる談話照応を用いるだけで、話し手の意図したウェイトレスについて対象関与的な言明をなしているものと解釈される。ここで、そのウェイトレスについて聞き手があらかじめ対象関与的な言明をなすことができるとはかぎらないから、聞き手は、(1-2) の会話によって、はじめてこのウェイトレスについて対象関与的に述べられるようになる。ここで、聞き手に必要とされているものは、話し手の発話を適切に理解し、それに応じて適切に照応表現を用いるという言語能力 (linguistic competence) だけであることを考慮すると、これは、**言語的な経験のみによって、個物への対象関与的な経路を新たに獲得できる**ということを示している。

残念ながら、ここまでの説明は、現象の観察に過ぎない。もし不定記述による導入が語用論的な現象であるとすれば、なぜそれが談話照応という統辞論的な現象からこれほどまでに強い制約を受けなくてはならないのかは、なお理論的に説明を必要する問題である。ここでは、談話照応の解釈にとって導入が棄却できない要素であることが、導入を言語的な現象と考えるべき理由を与えるという示唆を与えるにとどめておこう。

1.6. 導入的な意図と付随的な意図

1.5 節の最後で、導入が言語的な現象であるという見解を述べた。ここでは、似て非なる現象——付随的な意図——と対比させることで、この論点を強調しておきたい。

導入という行為は、単に、発話に付随してある特定の対象のことを頭に思い浮かべ、しかもそのことが聞き手にも了解されるというかたちの意図の相互忖度に尽きるものではない。具体例を見てみよう。話し手は、来る日も来る日も

藤沢周平を読みふけり、自宅に引きこもっているとしよう。それを見かねた聞き手が、バスケットボールの試合の切符をもたせて、無理やり話し手を送り出す。話し手は、翌日、その試合で見た姚明のことを思い出して、(2) と発話する。

(2)　　There is a basketball player taller than seven feet four inches.

聞き手は、歴史小説しか知らない話し手がこんなことを言うとは、昨日の試合で、誰がそれかは分からないけれど、とにかく誰か背の高い選手を見たからに違いないと察知する。また、話し手も、聞き手にそう思われるであろうと分かっている。すると、話し手がある特定の選手（姚明）のことを頭に思い浮かべていたということと、それが誰であるのかは聞き手に分からないということは、お互いに了解されていることになる。これは、一見したところ、導入が成立しているときに成立している種類の意図の相互忖度であるが、しかし導入の事例ではない。というのも、この場合、話し手はあくまで存在言明をなすことを意図して (2) を発話したのである。それゆえ、話し手の意図した主張の内容は、あくまで7フィート4インチ以上の身長のバスケットボール選手が存在するという一般的な事柄であり、たとえその存在言明を検証する事例として姚明という選手のことが意図されている（あるいは念頭に置かれている）としても、その姚明について述べることが意図されているわけではないからである[16]。ここで、主張の内容に直接寄与するわけではないこうした意図を、**付随的な意図**（subsidiary intention）と呼ぼう。談話解釈において、付随的な意図は、導入的な意図とは異なった振る舞いをする。たとえば、存在言明をなすことを目的として(2)を発話した場合、続けて以下のように談話を展開することはできない。

(2-1)　　There is a basketball player taller than seven feet four inches.
　　#Perhaps he is not taller than seven feet four inches.

この“#”は、その文の発話がその文脈では意図された解釈をもてないということの印である。すなわち、この場合、“he”を、“a basketball player taller than seven feet four inches”を先行詞とする談話照応として用いる解釈は許されない[17]。

1.7. 不定記述による導入の一意性

ここまで、暗黙のうちに、不定記述の導入的な使用が、ただひとつの対象を導入することを前提としてきた。このことは直観的には明らかであるが、決して自明ではない。そこで、もう一度、昨日出会った三人の可愛いウェイトレスに登場してもらい、検討をしておこう。

(1-2)　話し手：I met a pretty waitress yesterday. She has blonde hair.
　　聞き手：Take me to the cafe she worked at, please!

"a pretty waitress"を導入的に解釈し、二つの"she"はそれを受ける談話照応として解釈すると、継承要請により、どちらの"she"も、"a pretty waitress"の導入対象を受け継ぐ。このとき、どちらの"she"も、複数の導入対象を受け継いでいるとは解釈できないと思われる。第一に、(1-2) の冒頭の文の発話に続いて、たとえば以下のように談話が展開することはないだろう。

(1-3)　I met a pretty waitress yesterday.　*One of her has blonde hair.

もし、(1-2) の"she"が、"a pretty waitress"によって導入された複数の対象を受け継いでいるという解釈をもつのであれば、"one of her"によってその対象の一つを指す解釈もありえるかと思われるが、明らかにそのような解釈はない[18]。第二に、もし"she"が複数の導入対象を受け継ぐ解釈をもつとすれば、それらの対象は、(継承要請により、) 単数形の不定記述"a pretty waitress"の導入対象である。しかし、もし単数形の不定記述を一回だけ使用することで複数の対象を導入できるのであれば、(1-4) や (1-5) という展開もありえるかと思われるが、少なくとも直観的には明らかにそうでない[19]。

(1-4)　I met a pretty waitress yesterday.　#They have blonde hair.
(1-5)　I met a pretty waitress yesterday.　#One of them has blonde hair.

これらは、数の一致という統辞論的な要請が、導入という語用論的な現象に対しても制限を及ぼす一例と理解することができるかもしれない。そして、これらの観察は、不定記述による導入の一意性を強く示唆する。以下の仮説を立てておこう[20, 21]。

一意性仮説：導入的に使用された不定記述は、導入対象を一意にもつ。

さて、以上で、不定記述の導入的解釈がもつ特徴について、見るべきものは見たと思われる。2 節と 3 節では、不定記述は、なぜ導入的解釈をごく自然にもつのかを検討しよう。

2　導入的解釈の条件

本節では、不定記述の導入的な解釈が許容される条件、あるいは許容されない条件について、俯瞰的かつ直観的な観察を行う。3 節の議論に必要なだけの観察を得ることが目的なので、個々の観察に対する正当化や理論的な説明については、最小限に留める。

2.1.　導入的解釈が許される事例

まず、不定記述は、(1) とは異なる統辞論的な文脈に現れた場合にも導入的に解釈しうることを確認しておこう。

(1)　I met a pretty waitress yesterday.

(3)　A student cheated at the last exam.

(4)　There is a journalist who threw his shoe at the President.

(1) では、“a pretty waitress”は文の述部に、(3) では、“a student”は文の主部に現れているが、どちらも導入的な解釈を自然にもつ。(4) は、“there is”によって示される典型的な存在文であるが、“a journalist who threw his shoe at the President”は、ごく自然に導入的に解釈できるだろう[22]。

次に、同じひとつの文において、複数の不定記述がそれぞれ導入的に解釈されることもある。

(5)　A man was arrested on suspicion of stalking a girl.

二つの不定記述“a man”と“a girl”は、どちらもごく自然に導入的に解釈できる[23]。

また、束縛的な照応表現をもつことも許される[24]。

(6)　A secretary impeached her boss.

(7)　A man was arrested on suspicion of stalking a girl who was his neighbor.

まず、(6) において、"her"が"a secretary"を先行詞とする解釈は、"a secretary"への導入的な解釈を排除しない。次に、(7) では、"his"が"a man"を先行詞とする解釈は、"a man"への導入的な解釈を排除せず、また、"a girl who was his neighbor"への導入的な解釈も排除しない[25]。

2.2.　導入的解釈が許されない事例

少なくとも存在量化子以外の量化子や様相的操作子よりも狭いスコープをもつ場合には、不定記述を導入的に解釈することはできない。

(8)　Every student falls in love with a girl.

(9)　You will get a BMW someday.

まず、(8) では、"every student"という量化子のスコープの内側にあると解釈された場合、"a girl"は導入的に解釈できないであろう。(9) では、"will"という様相操作子のスコープの内側にあるかぎり、"a BMW"は導入的に解釈できないであろう。ここで、たとえば (8) の真理条件は以下のように表現できる。

(8-Sem)　$\forall x(\text{student}(x) \rightarrow \exists y(\text{girl}(y) \wedge \text{fall-in-love}(x, y))$

この真理条件を検証するためには、どの生徒についても、その生徒が恋に落ちる女の子がそれぞれいなければならない。このことは、ひとりだけ女の子を導入することができないという観察を、少なくとも直観的には十分に支持する根拠となるだろう。

同様に、以下のような場合も不定記述を導入的に解釈することはできない。

(10)　Taro and Jiro each met a pretty waitress yesterday.

この場合、"Taro and Jiro each"は、意味論的に文結合子を含んでいると解釈される。太郎と次郎は、それぞれ別個に可愛いウェイトレスに出会ったという意味であるが、たとえ話し手がそれぞれのウェイトレスのことを知り、意図してい

たとしても、それは付随的な意図に留まり、“a pretty waitress”によってその二人を導入することはできないと思われる[26]。

また、同じことは、不定記述のスコープが、否定よりも狭い場合や、条件法の前件もしくは後件だけに制限されている場合にも言える。

(11)　I don't have a house.

(12)　If Kuroneko Cafe hires a pretty waitress, it will flourish.

さらに、照応表現とロバ照応（donkey anaphora）を結ぶような不定記述についても同じことが言える。

(13)　If you meet a pretty waitress, you will fall in love with her.

その一方で、たとえ表層的には同様の統辞論的な文脈におかれていても、最大のスコープをもつように解釈される場合には、不定記述は導入的に解釈されうるだろう。

(8-wide)　Every student falls in love with a girl who visited the class yesterday.

(9-wide)　You will get a BMW of mine someday.

(10-wide)　Taro and Jiro each met a pretty waitress who worked at Kuroneko Cafe yesterday[27].

(11-wide)　I didn't respond to a customer's inquiry.

(12-wide)　If Kuroneko Cafe hires a waitress whom I met yesterday, it will flourish.

(13-wide)　If you meet a waitress I met yesterday, you will fall in love with her[28].

これらの事例では、下線を引いた不定記述が、当該の文において最大のスコープをとる解釈をごく自然にもち、同時に、導入的な解釈を自然にもつだろう。たとえば、(8-wide) の真理条件は、以下のように表現できる。

(8-wide-Sem)

$\exists x(\text{girl}(x) \wedge \text{visited}(x, \text{the class}, \text{yesterday}) \wedge \forall y(\text{student}(y) \rightarrow \text{fall-in-love}(y, x)))$

この真理条件を検証するためには、どの生徒も恋に落ちるような、(昨日クラスに来た) 女の子がひとりでもいればよい。この真理条件が、(8) とは異なり導

入に親和的であることは、容易に見て取られるであろう。

さて、こうしたスコープの問題とは別に、そもそも不定記述が存在量化子として解釈されず、それゆえに導入的な解釈が排除されることもあるかもしれない。そのひとつの候補は、不定記述の述定的な用法である。

（14）　That man is a philosopher.

“is a φ”や“become a φ”は、しばしば述定的に用いられ、存在量化としてではなく、あくまで述定として解釈される[29]。どのような背景的な状況を設定しても、この“a philosopher”に導入的な解釈――「あの男は、ある哲学者だ」という解釈――をもたせることは難しいように思われる。

さらにもうひとつ、不定記述の総称的な解釈も候補になるかもしれない。

（15）　A whale swims very well.

（15）は、個別的な鯨についてではなく、鯨一般についての総称的な言明である。この（15）で、あるひとつの鯨を導入することは難しいだろう[30]。

これらの観察は、不定記述が導入的な解釈を許容するためには、少なくとも意味論的に、最大のスコープをとる存在量化子として解釈される必要があるということを示唆する。そこで、以下の仮説を立てておこう。

最大スコープ仮説：不定記述が導入的に解釈されるときは、その文の意味論的解釈において存在量化として最大のスコープをもつ。

2.3.　洞察

ここで注意したいことは、最大スコープ仮説が指定する条件は、不定記述を受ける談話照応が許容されるための条件と等しいことである[31]。言い換えれば、不定記述が導入的に解釈されるときは、その記述を受ける談話照応が許容されるということである。一方、継承要請が正しければ、導入的な不定記述を受ける談話照応は、必ず同じ導入対象を受け継ぐことになる。すると、**不定記述が導入的に解釈されるためには、その導入対象を受け継ぐ照応表現が使用できなければならない**という洞察が与えられる。

3　不定記述の導入的用法

本節では、不定記述の導入的な解釈を、「用法」とみなすべきひとつの道筋があることを論じる。すなわち、不定記述の使用を解釈するさいに、導入的な解釈が選好されることを導くような推論図式があることを指摘する。

議論は、二つのメタ言語的な推論図式を段階的に組み合わせる[32]。第一の推論図式は、どちらも存在量化子である“some”と“a”の対比を背景に、 実際に“a”が選択された場合に、そこにある種の一意性が意図されていることを示す図式である。第二の推論図式は、“a”に一意性が意図されていることを前提とした上で、その“a”が、単数形の“the”、そして“that”との対比を背景として、そこに導入的な解釈が意図されていることを示す図式である。この二段階の推論図式が一般的に期待できることを示すことで、不定記述の解釈として導入的な解釈が選好される構造的な理由がある——用法と呼ぶべき理由がある——ことを示すのが、本節の道筋である[33]。

3.1.　第一のメタ言語的推論図式：“a”と“some”の選択

“a”と“some”は、意味論的には、どちらも存在量化として扱われる。つまり、しかるべき性質をもつ対象が存在すれば、それがどの対象であるのかにかかわらず、意味論的には真となる。(ただし、“some”が複数形の名詞の決定詞となる場合には、しかるべき性質をもつ二つ以上の対象が要求されるかもしれない。)たとえば、昨日、話し手が三人の可愛いウェイトレスに出会ったという文脈では、(16) と (17) は、どちらも真となる。

(16)　I met <u>a pretty waitress</u> yesterday.

(17)　I met <u>**some** pretty waitresses</u> yesterday.

それならば、話し手は何を意図して、あるときに (16) を用い、あるときに (17) を用いるのであろうか。逆に、聞き手の側からは、(16) あるいは (17) が用いられていることから、その話し手の意図をどのようにして推論できるだろうか。一般的に、聞き手が話し手の意図を再現できると期待できるかぎりにおいて、話し手は単にその意図をもつのでなく、その意図を伝えるという意図も合理的

にもつことができる。ここに、言語表現の選択から生じるメタ言語的な推論が可能になる。

（16）と（17）は、それだけを観察した場合、漠然とした単数と複数の区別が示唆されるだけである。繰り返しになるが、（16）の真理条件はあくまで存在言明であって、そのかぎりでは「単数」は表層的な特徴である。しかし、後続の談話照応の解釈を考慮するに及んで、（16）と（17）の違いは明瞭になる。

（16-1）　I met **a** pretty waitress yesterday. She has blonde hair.

（17-1）　I met **some** pretty waitresses yesterday. They have blonde hair.

ここで、談話照応の解釈について Evans（1977）や Kadmon（1990）が与えた分析によれば、“a pretty waitress”を受ける“she”には一意性が要求され、その一方、“some pretty waitress”を受ける“they”には一意性は要求されない。むしろ、ある特定の性質を充たす対象すべてを指すという包括性が要求されると考えられる。（17-1）の場合、もっとも典型的には、“they”は、昨日、私が出会った可愛いウェイトレス全員を包括的に指すと解釈される[34]。また、この一意性の有無は、たとえば私が実際に何人のウェイトレスに出会ったのかといった経験的な事実に依存して発生するわけではない。私の意見では、この“she”と“they”の選択――一意性の有無についての選択――に、あらかじめ指図を与える指標として、“a pretty waitress”と“some pretty waitresses”の選択も理解されるべきである[35, 36]。

さて、この対比は、（16）もしくは（17）という発話と、談話照応の解釈だけに依拠しており、それゆえ、話し手と聞き手が相互に了解できることになる。ここに、“a”と“some”の選択がメタ言語的な推論の対象になると考えるべき根拠がある。つまり、話し手が実際に“a”を選択したなら、聞き手は、話し手は一意的な対象について述べる意図をもち、かつ、それを表明（manifest）しているのだと推論すべき根拠を実際にもったことになるのである。

3.2.　第二のメタ言語的推論図式：“a”、“the”、“that”の選択

第一の推論図式は、“a”の使用から、話し手は一意的な対象について述べる意図を表明しているという推論を引き出すものであった。第二の推論図式は、この推論を踏まえた一意的な“a”、単数の“the”、“that”が選択の候補を形成する。

たとえば、話し手は、昨日出会った、あるひとりの可愛いウェイトレスのことを話そうとしている。そのための表現として、(18)、(19)、(20) が候補として考えられるだろう。

(18)　I met **a** pretty waitress yesterday.

(19)　I met **the** pretty waitress yesterday.

(20)　I met **that** pretty waitress yesterday.

このとき、私は、この三つの候補をどのように使い分けるだろうか。まず、一意的な“a”、単数の“the”、“that”に、それぞれ適切に使用するための条件があるのであれば、それにしたがう必要があるだろう。

まず、“a pretty waitress”という不定記述を含む (18) については、あとの二つと異なり、特に充たすべき条件はないと思われる。

次に、“the pretty waitress”という確定記述を含む (19) については、この確定記述が適切に理解されることが見込めなくてはならない。Russell (1905) の分析を単純に適用してしまうと、(19) は、可愛いウェイトレスがこの世にひとりしか存在しないことになってしまうので、当然、何らかの性質を補う必要があるが、話し手としてはそれを聞き手も了解できることが期待できなくてはならない。たとえば、(19) の“the pretty waitress”は、“the pretty waitress of Kuroneko Cafe”などと補われるものと聞き手も了解している必要がある。

最後の“that pretty waitress”という直示句を含む (20) についても、この直示句が聞き手に適切に理解されることが見込めなくてはならない。そのためには、Kaplan (1989) や Evans (1982) が指摘するように、当のウェイトレスを何らかの仕方で聞き手に直示できるような状況でなくてはならない。

これらの条件は、(19) や (20) が適切に発話された場合、聞き手は、“the pretty waitress”の表示対象や“that pretty waitress”の指示対象を同定することができるが、(18) については、たとえ適切に発話されたとしても、聞き手による同定は要求されない。さて、Grice (1967) の挙げた量の第一格率——より情報付加的な発話をせよ——が適用できるとすれば、(18) よりも (19) や (20) の方が情報付加的なので、もし (19) や (20) が適切に使える状況であれば、この二つが選好されると見込まれ、逆に、(18) が使用された場合には、(19) や (20)

が適切に使えない状況であることが見込まれることになる。そして、(19)や(20)が適切に使えない状況とは、聞き手による当該の対象の同定が見込めない（と話し手が考えている）状況である[37]。

さて、第一の推論図式と同じく、この推論は、話し手にも聞き手にも利用可能な情報だけを用いてなされている。それゆえ、話し手は、(18) を使用することで、話し手がどの対象を一意に意図しているのかについて、聞き手の側からの同定が見込めないということを表明しているのだと言えるだろう。

3.3. 不定記述の導入的用法

以上の二段階の推論図式は、以下のように整理できる。

状況：話し手は、“a φ”を含む文 S(a)を発話する。S(a)において、その“a φ”は存在量化として最大のスコープをもつ。また、S(a)に含まれるその“a φ”を“some φs”、“the φ”、“that φ”で置き換えて得られる文を、それぞれ S(some)、S(the)、S(that)とする。

第一のメタ言語的推論図式：話し手は、S(some)を使用せずに、S(a)を使用した。その選択は、話し手が、一意的な対象について述べることを意図しているからであると考えれば説明がつく。聞き手がこのように推論することは、話し手にも推測できる。したがって、話し手は、S(a)の発話によって、**一意的な対象について述べることを意図していること**を語用論的に伝えようとしている。

第二のメタ言語的推論図式：話し手は、S(the)や S(that)を使用せずに、S(a)を使用した。その選択は、話し手が、自分が述べようと意図している一意的な対象を、聞き手の側から同定させる見込がもてないと考えているからであると考えれば説明がつく。聞き手がこのように推論することは、話し手にも推測できる。したがって、話し手は、S(a)の発話によって、**自分が述べようと意図している一意的な対象を、聞き手の側から同定させる見込がもてないと考えていること**を語用論的に伝えようとしている。

この推論の帰結から聞き手は、話し手が、当該の発話を導入的な発話として意

図しているものとして解釈できるだろう。そして、この推論図式は、注 35 と注 37 で示した種類の阻害要因がなければ、標準的（default）に成立すると思われる。それゆえ、この二つの推論図式は、不定記述の導入的な解釈を「用法」とみなすための正当化に寄与すると思われる。

3.4. おわりに

本稿の議論は、いくつかの点で不十分である。第一に、談話照応の意味論についての検討が欠けているために、継承要請をはじめ、不定記述を受ける談話照応の解釈に関する一連の考察が、理論的に述べられていない。第二に、3 節で扱ったメタ言語的推論図式についても、理論的な基盤と正当化が与えられていない。第三に、多くの論点について、理論的にありうる代替案についての検討が欠けている。このため、本稿の議論は、良く言って、私が導入と呼ぶ現象についてのひとつの仮説の素描である。今後、これらのひとつひとつについて解像度を上げた議論を与えることが重要な課題となるであろう[38]。

注

[1] この命名は、Donnellan（1966）の「確定記述の指示的用法（referential use of definite descriptions）」にあやかったものである。また、“introduce”に対応する形容詞としては、ふつう、“introductory”が用いられる。ここでは、専門用語として導入していることを示す意図を込めて、日常的な文脈ではあまり用いられない“introductive”を選んだ。

[2] ただし、本稿は、導入概念自体の擁護を行うものではない。言語哲学の文脈における導入概念の意義については、限定的な議論ではあるが、荒磯（2009）を参照のこと。

[3] より正確には、主張、命令、質問などの言語行為の実現に寄与するという意味で、より基本的な言語行為として位置づけることができる。

[4] こうした指示概念の理解については、Donnellan（1966）、Donnellan（1967）、Kaplan（1989）、Evans（1982）、荒磯（2005）を参照のこと。指示と導入の対比については、さらに荒磯（2009）を参照のこと。

[5] 不定記述に意味論的多義性を認め、量化的解釈と指示的解釈の両方を意味論的に並列的と考える立場としては、代表的なものとして Fodar & Sag（1990）があるが、本稿では採用しない。

[6] “I”と“yesterday”という指標表現がそのまま用いられているが、この議論を進める上では本質的な問題にはならないと思われるので、ここではそのままにしておくことにする。

[7] なぜ近似的であるのかについては、注 8 と注 9 を参照のこと。

[8] ただし、話し手が Pretty（X）や Waitress（X）を主張していると考えるべきなのか、それとも何か別な種類の態度をとっている——たとえば前提している——と考えるべきな

のかは、自明ではない。本稿では、この点については中立的に進めたい。

[9] 導入的な言明に対して聞き手がもつ理解の内実を明らかにすることは重要な課題である。というのも、その内実は、聞き手が新たな対象について対象関与的な態度をもてるようになることを正当化するための条件に関係すると思われるからである。

[10] Kamp（1981）の談話指示（discourse referent）と類比的に考えることができるかもしれない。

[11] もちろん、うまく状況が整えば、(2) や (3) の発話によって、あるひとりのウェイトレスを意図していることを聞き手に伝えられるかもしれない。しかし、そうした場合に、1.4 節で取り上げる誤記述の可能性や、1.5 節で取り上げる継承要請が充たされるかどうかは、一般的には明らかではない。少なくとも、これらの例には、(1) における不定記述のように、導入的な解釈を**系統的に**引き起こす要素はないだろう。

[12] この観察が正しいとすると、不定記述の導入的な解釈は、会話の含みの分離可能性（detachability）（Grice（1967））をもたないことになる。

[13] この論点については、荒磯（2009）も参照のこと。

[14] 本稿では、談話照応とは、①その文において最大のスコープをとる量化表現を先行詞とした、②文をまたいだ照応であると定義しておく。

[15] ただし、継承要請に理論的な説明を与えるためには、談話照応の意味論を合わせて検討する必要がある。談話照応の意味論として代表的なものとしては、Evans（1977）、Kamp（1981）を、そこから生じるいくつかの語用論的な問題については、Kadmon（1990）、Heim（1990）を、継承要請との関連については荒磯（2009）を参照のこと。

[16] 同じことは、指示についても言える。たとえば、古代ギリシャの哲学を話題にしているときに、ふとパルメニデスを思い出して話し手はこう言う。

（α）　There is a philosopher who holds monism.

このとき、聞き手も、（話し手の哲学的素養からすると、）話し手がパルメニデスを思い浮かべているのに違いないと了解できる。しかし、この場合、“a philosopher who holds monism”がパルメニデスを指示しているとは解釈できないだろう。

[17] 談話照応の可否によって、導入や指示の有無を直観的にテストできるかもしれない。

[18] もっとも、照応的な“her”は意味論的に一意性を含意し、それゆえに“one of her”は常に不適切な言い回しである――したがって、この議論は不必要なものであると思われるかもしれない。しかし、たとえそうであるとしても、そうした意味論的な制限が語用論的な解釈にも制限を与えることは決して自明なことではないと思われるため、迂遠なようであるがこのように議論を進行させた。

[19] ただし、先行詞にあてはまる対象の性が不明であるときに用いられる単数の“they”は考慮に入れないことにする。この場合は、先行詞の主要部が“waitress”であり、女性を指していることは語の意味から推察される。

[20] さらに、“she”の先行詞は、単数形であることが要求されるものと思われる。

（1-6）　I met some pretty waitresses yesterday.　#She has blonde hair.

もし“she”に複数解釈がありうるなら、“some pretty waitress”を受けられてもおかしくはないが、たとえ語用論的にであっても、その解釈は許容されないと思われる。

[21] Kadmon（1990）は、不定記述を受ける談話照応が、一般的に一意的に解釈されると説得的に論じている。もしその議論が目下の談話照応の解釈にも適用でき、さらに継承要請も認めるならば、直に一意性仮説が帰結する。注 30 も参照のこと。

[22] “a ϕ of mine”や“a ϕ who ϕ”など、いくつかの言い回しは、特に導入的な解釈を惹起する。

Fodar & Sag（1990）を参照のこと。ただし、彼らは、指示と導入の区別を立てているわけではなく、あくまで指示的な不定記述として分析している。

[23] 興味深いことに、“a girl”を導入的に、“a man”を単なる存在主張として解釈することは少なくとも非常に不自然であるが、“a man”を導入的に、“a girl”を存在主張として解釈することはそれほど不自然ではない。これは、“a girl”と“a man”という二つの不定記述を解釈するにあたって、潜在的な順序があると考えることで説明できるかもしれない。

[24] 先行詞が照応表現を c-統御（c-command）している場合を指す。この場合、照応表現は先行詞に束縛される変項として解釈される。

[25] 注 23 と同じ指摘ができる。そのことは、“a man”が“a girl who was his neighbor”の“his”に照応していることというより、“a man”が“a girl who was his neighbor”を c-統御していることが重要であることを示していると思われる。

（β-1）　A girl kicked a boy last night.

（β-2）　A boy was kicked by a girl last night.

両者は、同じ真理条件をもち、同じ不定記述が用いられているが、（β-1）では、“a boy”だけを導入的に解釈することが不自然であり、（β-2）は、“a girl”だけを導入的に解釈することが不自然であるように思われる。もしこの観察が適切だとしたら、後述の最大スコープ仮説との関連が伺われるかもしれない。

[26] ただし、以下のように展開できるかもしれない。

（10-1）　Taro and Jiro each met a pretty waitress yesterday. I know they are sisters.

そして、この“they”を、“a pretty waitress”を受ける談話照応として解釈し、太郎と次郎が出会った二人のウェイトレスを受け継ぐと考える理論的な余地はあるかもしれない。ただし、談話照応に関して、性と数が一致しているものと、（10-1）のようにそうでないものが、意味論と語用論のそれぞれについてどの程度同じ分析を許すのかは明らかではない。

[27] 「昨日、太郎と次郎は、クロネコカフェのある可愛いウェイトレスに、それぞれ別個に出会った」という解釈である。

[28] この“her”は、もはや“a waitress whom I met yesterday”を先行詞とするロバ照応ではなく、この不定記述に支配される束縛的な照応として解釈される。

[29] “is a φ”という形式の文を、述定的な言明ではなく、同一性言明として解釈する余地がないわけではないが、非常に不自然な解釈であるように思われる。

（γ）　That man is a philosopher who tried to defend monism last session.

これを同一性言明として解釈するためには、“that man”によって直示的に与えられる対象と、“a philosopher who tried to defend monism last session”によって指示または導入される対象が同一であると解釈することが求められるが、あえて対象を指示または導入していると解釈する必要性がどこにあるのかが明らかではない。一方、（γ）の否定ではそうしたことは起きないために、十分導入的な解釈を許容するように思われる。

（γ-neg）　That man is **not** a philosopher who tried to defend monism last session.

[30] ただし、会話の含みとして特定の対象について述べることはできるだろう。親しい人を失った夜にも空腹を感じて、「人間とは哀しい生き物だ」と、ある意味で自分を指して言うような場合である。しかし、これが導入の事例ではないことは明らかであろう。

[31] ただし、Kadmon（1990）では、以下のような反例が挙げられている。

（δ）　Every chess set comes with a spare pawn. It is taped to the top of the box.

これは、一種の量化的従属（quantificational subordination）として解釈されるべきと思われる。日本語では、この種の談話照応が導入的な解釈をもつと思える事例がある。

（ε）　すべての将棋セットには、予備の歩がついている。太郎は、それ／その歩に気がつかないで箱ごと捨ててしまった。次郎は、それ／その歩を見つけて太郎に返してあげた。

二回用いられた「それ／その歩」は、ある同じひとつの歩の駒を指すと解釈できるだろう。ただし、それは「予備の歩」によって導入されたものではなく、最初の「それ／その歩」の使用によって導入されたと見るべきであり、その意味で、たとえ「予備の歩」と「それ／その歩」が談話照応を形成していると解釈できるとしても、継承要請は発生していないものと思われる。この種の事例をどう解釈するのかは、今後の研究課題である。

[32] メタ言語的推論図式という発想は、**一般化された会話の含み**（generalized conversational implicature）についての、Levinson（2000）の理論に触発されたものであり、大きな恩恵を受けている。とはいえ、本稿の議論は、いくつかの重要な点で Levinson（2000）の理論と異なる。第一に、一般化された会話の含み、とりわけ尺度的な含み（scalar implicature）の導出では、対比される文の真理条件が推論の対象となるが、本稿の議論では、後続の談話に課せられる制限や、発話の適切性条件が推論の対象となる。第二に、Levinson（2000）の理論で導出されるのは含みの内容であるが、本稿の議論では、不定記述をどのような目的で用いるのかについての話し手の意図であり、それ自体は、発話についてのメタ的な情報である。こうした違いがあるため、本稿では、不定記述の導入的用法を、一般化された会話の含みの枠組みに位置づけることは避けることにした。

[33] 本稿の議論は、いくつかの英語特有の表現に注目して組み立てられている。日本語における導入についても、かたちをかえて同様のメタ言語的な推論図式が存在することは十分見込めるであろう。それについては稿を改めて論じたい。

[34] この議論は、Evans（1977）、Kadmon（1990）の E-type 代名詞理論に大きく依存している。しかし、談話照応の解釈についての他の意味論――たとえば談話表示理論――を採用したとしても、同様の議論を構築する余地はあるかもしれない。この点を明らかにできなかったことが、本稿執筆における最大の遺憾である。本稿 3 節の議論が正確にどのような理論を前提とすべきなのかを明らかにすることが、今後の重要な課題である。

[35] ただし、“a φ”と“some φ s”のどちらも有意味な文脈であるという前提のもとで、はじめてこの対比は有効になる。そして、純粋に存在的な解釈がある。

（ζ）　There is a philosopher who thinks the world was made 5 minutes ago.

たとえば、様々な哲学的発想を検討する文脈で（ζ）と発話したら、単なる存在言明としてごく自然に解釈されるであろう。この解釈は、単に（ζ）の真理条件的な解釈に尽き、以下に見ていく一連の一意性をもつ解釈と対立する。したがって、純粋に存在的な解釈をとる不定記述は、談話照応の先行詞とはならない。また、背景的な状況や、談話の文脈によっては、“there is”構文にかぎらず存在的な解釈が選好されることがある。

（η）　話し手１：Do you have something to write?
　　話し手２：Yes, I have a fountain pen.

話し手２は、筆記具をもっているかという問いに対して、万年筆をもっていると答えている。複数の万年筆をもっていたとしても、そのどれかを意図する必要はないだろう。一般に、存在的な解釈によって、会話の脈絡で要求されている情報を十分に与えられるのであれば、あえて導入的に解釈されることはないであろう。

[36] そして、この対比は、“a pretty waitress”や“some pretty waitresses”が談話照応の先行詞となりうる、つまり、（16）や（17）において最大のスコープをもつということを前提とし

て成立する。これは、この対比の条件が、導入的な解釈の条件と等しいということであり、両者の関連を示唆するように思われる。

[37] 特に有効な発話の状況や背景的な情報が用意されている場合には、この推論は棄却されるであろう。次の事例では、**発話の状況**が利用可能である。

（θ）　A man jumped.

たとえば、たったいま話し手と聞き手の目の前で崖から飛び降りた男について述べるために、（θ）と発話することができる。聞き手は、自分の置かれた知覚的な状況と（θ）の内容を結びつけることで、話し手が誰のことを意図しているのかを直示的に察知することができる。指示対象が与えられているので、それによって談話照応の一意性条件が充たされ、（θ-1）などと展開することができる。

（θ-1）　話し手：A man jumped.
　　聞き手：Oh, it's terrible. Why did he?

次に、**背景的な情報**が利用可能な場合がある。

（ι）　Japan has a prime minister.

この（ι）は、一見したところ、純粋な存在解釈を選好するようにも思われるが、ごく自然に（ι-1）と展開できる。

（ι-1）　Japan has a prime minister. But I do not know who s/he is.

これは、ひとつの国に首相は一人しかいないという知識が背景にあるために、（ι-Sem）を検証する対象が一意に決まることが期待でき、（ι-Prag）を導くことができるからである。

（ι-Sem）　$\exists x(\text{Prime-minister}(\text{Japan}, x))$

（ι-Prag）　$\exists x(\text{Prime-minister}(\text{Japan}, x) \wedge \forall y(\text{Prime-minister}(\text{Japan}, y) \rightarrow x=y))$

この（ι-1）では、背景的な知識をもとに"s/he"の一意性条件が決まるために、話し手は、実際にどの対象がその性質を充たすのか――誰が日本の首相であるのか――を知っている必要はない。

[38] 本稿は、2009年度哲学若手研究者フォーラムにおける筆者の発表「指示と導入――意図の忖度から――」の一部を敷衍し、書き下ろしたものである。本稿執筆にあたり、編集担当の世話人を通して、私にはそれが誰であるのかは知らないことになっている何人かの方々から有益なコメントを頂戴した。このことについて、私は何人かの方々のことを思い浮かべながら、しかし、あくまでそれが誰であれコメントを頂戴した方々、そして編集担当の世話人に対して謝意をあらわしたい。なお、本稿は、筆者が学術振興会特別研究員として文部省科学研究費（特別研究員奨励費）の交付を受けて行った研究成果の一部である。

文献

荒磯敏文，(2005)「痕跡を通した指示をともなう確定記述の指示的用法について」，『科学哲学』，日本科学哲学会，38巻, 1号，47-61頁.

荒磯敏文，(2009)「指示と導入――不定記述を受ける談話照応との関連から――」，『科学哲学』，日本科学哲学会，42巻, 1号，65-82頁.

Donnellan, Keith. (1966) "Reference and Definite Descriptions", *Philosophical Review* 75, pp. 283-304.

Donnellan, Keith. (1967) "Putting Humpty Dumpty Together Again", *Philosophical Review* 77, pp. 203-215.

Donnellan, Keith. (1978) "Speaker Reference, Descriptions, and Anaphor", in P. A. French et al. (eds.), *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*, Minneapolis: University of Minnesota Press, pp. 28-44.

Evans, Gareth. (1977) "Pronouns, Quantifiers and Relative Clauses", *Canadian Journal of Philosophy* 7, pp. 467-536.

Evans, Gareth. (1982) *The Varieties of Reference*. Oxford: Clarendon Press.

Fodar, J. D., and Sag, I. A.. (1982) "Referential and Quantificational Indefinites", *Linguistic and Philosophy* 5, pp. 335-398.

Grice, Paul. (1967) "Logic and Conversation" in P. Grice, *Studies in the Way of Words*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1989, pp.22-40.

Heim, Irene. (1990) "E-type Pronouns and Donkey Anaphora", *Linguistics and Philosophy* 13, pp. 137-177.

Kadmon, Nirit. (1990) "Uniqueness", *Linguistics and Philosophy* 13. pp. 273-324.

Kamp, Hans. (1981) "A Theory of Truth and Semantic Representation", in J. Groenendijk, T. Janssen and M. Stokhof (eds.), *Formal Methods in the Study of Language*: *Proceedings of the Third Amsterdam Colloquium*, Part I, Mathematical Centre, Amsterdam, pp. 227-321.

Kaplan, David. (1989) "Demonstratives", in J. Almog, J. Perry, and H. Wettstein (eds.), *Themes From Kaplan*, New York: Oxford University Press, pp. 481-563.

Levinson, Stephen C.. (2000) *Presumptive Meanings*, Cambridge, MA: MIT Press.

松阪陽一，(2008)「指示と意図」，『岩波講座哲学 03　言語／思考の哲学』，岩波書店，15-42頁.

Neale, Stephen. (1990) *Descriptions*, Massachusetts: MIT Press.

Russell, Bertrand. (1905) "On Denoting", *Mind* 14, pp. 479-493.

Strawson, P. F.. (1952) *Introduction to Logical Theory*, London: Methuen.

（あらいそ　としふみ／日本学術振興会特別研究員 PD）